

国立国語研究所学術情報リポジトリ

How to interrupt in multiactivity: Talking and baking or doing makeup

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天谷, 晴香, 田中, 弥生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003501

マルチアクティビティにおける作業の優先と会話の補填： 共同調理場面・他者化粧場面を例に

天谷 晴香（国立国語研究所音声言語研究領域）[†]

田中 弥生（国立国語研究所音声言語研究領域）

How to interrupt in multiactivity: Talking and baking or doing makeup

Haruka Amatani (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Yayoi Tanaka (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

日常会話は共同作業を行いながら成されることが多い。日常生活における共同作業は作業活動と会話活動のマルチアクティビティとして捉えることができる。参加者たちは相手の行動・発話とタイミングを調整しながら自らの行動・発話を行い、協力的に作業と会話を進捗させていく。作業の目的とは別に、会話には社会的関係を良好に保つ目的がある。良好な人間関係は作業の達成に間接的に寄与するが、直接的には会話の進行が作業の進行を妨げることがある。作業の見通しを誤ってある参加者がエピソードを話しはじめ作業の進捗を妨げる場合、別の参加者はエピソードへの反応が期待される位置で沈黙を保ったのち作業の指示発話を行い相手に作業への復帰を促す。作業再開後エピソードトークを遮った参加者が適宜先程のエピソードに言及して会話活動の補填が成される。二者による調理場面、化粧場面から事例分析を行う。また発話は Cloran の修辞ユニット分析を用いて分析し、特に脱文脈度の低い「行動」を示す発話を作業活動の指示発話の指標とする。

1. はじめに

共同作業中、雑談が可能になる時間帯があり、作業行程をよく理解していない参加者は現作業行程中の周囲の様子から雑談開始のタイミングを掴んでいるようだ。作業の行程が移行する時点は雑談を避けたいタイミングである。このタイミングをしばしば作業行程を把握していない参加者は正確に掴めず雑談を続けてしまう。この時、作業行程を次に進めたい別の参加者は雑談を遮る必要がある。雑談を遮る方策を、共同作業中の会話の談話構造と非談話的キューから本研究では明らかにしたい。

ある作業を行いながら会話も行うような状況をマルチアクティビティを行なっているとして、作業と会話がいかに互いに破綻せずに行われているか相互行為研究の分野でマルチアクティビティ研究が行われてきた。(Mondada 2012 他)

Toerien and Kitzinger(2007)では、他の参加者の雑談を遮るために言語的・身体的に何度かアプローチを試みるある参加者の試行の例として、美容サロンにおける眉の糸脱毛の施術場面を扱っている。被施術者は施術台で横になった状態で目を閉じ施術を受けながら、施術者の糸脱毛の技術について質問を続ける。この時、被施術者は眉の糸脱毛の技術を話題にして施術者に質問を複数投げかける。施術者は被施術者に自身のまぶたを持ち上げる行為を依頼しようとするが、被施術者は目を閉じて施術を受けていることもあり、なかなか施術者の意図に気づかず雑談的な話題を続ける。言語的・身体的に施術者は何度か躊躇を見せつつ、最終的に被施術者の肩に手をあてて「ではまぶたを押さえてください。」と声をかける。

[†] h-amatani@ninjal.ac.jp

Toerien and Kitzinger は施術者の躊躇を感情労働の文脈で分析した。本研究ではこの美容サロンの事例を参加者が別の参加者の雑談を遮るために試みを繰り返すひとつのモデルケースとして解釈する。ここから、ある参加者が別の参加者の雑談を遮る際のモデルとして、i) 動作で作業の合図を出す、ii) 発話で作業の合図を出す、iii) 合図ののち作業のフェーズが移行した雑談が続けられる、という手順を見出した。以下、量的な分析と事例分析から、雑談を一時的に遮断する談話モデルを検討する。

2. 方法

2.1 データ

2つの動画を対象データとした。1つは第一筆者が個人で録画したもので、筆者自身が母親に化粧を施す場面である。化粧を趣味とする娘が自身の化粧方法を母親に試している。以下の分析では娘を D、母親を M として記述する。動画は Mac Book Air の内蔵カメラで撮影された。動画の長さは全体で 28 分 26 秒で、化粧の行程の初めから終了までを収めている。もう 1 つのデータは『日本語日常会話コーパス (以下、CEJC)』(小磯ほか 2020)から、T014_018 を採用した。動画の長さは 70 分 20 秒である。友人同士でシフォンケーキを共同で作っている場面である。協力者(以下の分析では参加者 S とした)はお菓子作りに慣れておらず、お菓子作りに詳しい友人(以下の分析では参加者 T)に友人宅で作り方を教わっている。

2.2. アノテーション

発話トランスクリプトは CEJC の転記マニュアルに基づいて行われたものを使用する。CEJC の転記基準は『日本語話し言葉コーパス(CSJ)』(前川 2004)の基準を口語表現等、日常会話に現れやすい発話により適すよう改定されたものである。

2.2.1 発話アノテーション

本分析では、Halliday の機能文法に基づき Cloran(1994, 1995, 2010)が発案した修辞ユニット分析(Rhetorical Unit Analysis)を用いて、各メッセージ単位(Hasan 1991)に修辞機能を付与し脱文脈度を測った。英語を分析した Cloran に倣い、佐野(2010)および佐野・小磯(2011)が日本語に適化した脱文脈度のスケールを論じており、本分析でも佐野・小磯に倣った。脱文脈度は「提言(proposal)」と「命題(proposition)」として分類されるメッセージ単位に付与される。「提言」は品物・行為の提供あるいは要求、つまり交換に関するメッセージで、「命題」は情報の交換に関するメッセージである。それらに当たらない発話、たとえば挨拶や体言のみで文脈からも述語を復元できない発話は位置づけ(positioning)として分析される。「はい。」などの返事や独り言のような「バニラエッセンス。」などの発話は位置づけである。

脱文脈度は基本的に文(clause)の時空間的位置によって決定される。分析手順は発話を概ね文に相当するメッセージ単位に区切り、中核要素(central entity)と現象定位(event orientation)をまず同定する。中核要素は文の主語に相当するものである。主語が話者が話している場所・状況から見て空間的にどの位置に存在するか、状況内で会話の参加者なのか・状況内で非参加者(事物や会話に参加していない人)なのか・状況外にある事物・人物なのかを判断する。また、現象定位は文の述部の時制から同定する。現在の事象で非習慣的か・現在の事象で習慣的か・過去の事象か・未来の事象で意図的か・未来の事象で非意図的か・仮定の事象かを分類する。「提言」に分類されたメッセージは「行動」という機能が付与される。「命題」のメッセージは、中核要素(≒主語)の空間的位置と、述部に現れる現象定位の時間的位置の組み合わせから、「実況・状況内回想・計画・状況内予想・状況内推測・自己記述・観測・報告・状況外回想・予測・推量・説明・一般化」の 13 の機能に分類される。「行動」を含めて 14 の修辞機能を日本語のメッセージには付与することができる。

2.2.2 動作アノテーション

本分析では、作業中の手の動作をアノテーションするため、Kendon(1982, 2004)のジェスチャー単位(Gesture Unit)を援用した。ジェスチャー単位はひとつ以上のジェスチャー句から成り、ジェスチャー句はジェスチャー区間に分けられる。ジェスチャー区間には準備(preparation; P)、ストローク(stroke; S)、復帰(retraction; R)、保持(hold; H)の4つがある。ストロークがジェスチャー句の最も主要な動きで、準備はストロークを始める位置まで手が動く区間、復帰はストロークが終わってから元の基本的な位置に戻ってくるまでの区間、保持は動きが止まっている区間を示す。

2.3 量的分析

両データにおける各参加者の発話脱文脈化度を比較する。他者化粧データ 28分26秒のうち10分2秒から20分1秒までの約10分間、共同調理データ 70分20秒のうち18分0秒から28分3秒までの約10分間に起きた発話をアノテーション・分析対象とした。

各10分間のデータの発話の内、脱文脈度が付与されたメッセージの数は、他者化粧データのDが62、Mが29だった。また、共同調理データのTが121、Sが115だった。脱文脈度が付与されない発話には主に位置付け(positioning)と呼ばれる発話があり、返事や呼びかけ、述部を伴わない名詞句単独の発話は位置付けに分類した。

表1. 各参与者脱文脈化度別発話数

	他者化粧データ		共同調理データ	
	D(施術者)	M(被施術者)	T(教える側)	S(教わる側)
01. 行動	6	0	11	2
02. 実況	15	7	27	21
03. 状況内回想	0	1	4	9
04. 計画	0	0	1	2
05. 状況内予想	0	0	3	0
06. 状況内推測	0	0	7	2
07. 自己記述	5	7	3	5
08. 観測	14	2	21	21
09. 報告	0	0	1	2
10. 状況外回想	1	1	8	9
11. 予測	0	0	0	0
12. 推量	0	0	5	6
13. 説明	21	11	30	36
14. 一般化	0	0	0	0
計	62	29	121	115

Cloran および佐野の脱文脈化度について、「今ここ(here-and-now)」に属する発話は脱文脈化度1の「行動」と2の「実況」である。「行動」は相手や状況に働きかける提言を表す。「実況」は主語が会話者(interactant)かあるいはその場にいる人・事物で、かつ述語が現在を表すものである。他に、時空間軸から談話分析をした研究にChafe(1994)がある。Chafeは発話時あるいは執筆時の話者・書き手の直接的な意識モード(immediate conscious mode)と置換された意識モード(displaced conscious mode)を提案した。この直接的な意識モードでの発話は、Cloranの「行動」と「実況」の機能を持つ発話と対応すると考えられる。こ

必要があり、4.62 秒の沈黙が続く。この沈黙から施術者が話題を早く止めたかったことが伺える。そうしながら 18D になると「まああんまりまじまじと見てもあれやけどよ。」と 16M の「よく見れない。まじまじと。」の発話に対する応答を行う。早めに遂行発話をしたことで場の主導権を施術者 D が取って被施術者を次の行程に備えさせたことと、沈黙して自身の主導権を確認したのち先の話題に応答したことが伺える。このようなある種、強硬手段に D が出たことはアイブローパレットの準備中に M が話し続けていたためと考えられる。

一方で、M は 14M で「きれいやなっと思って。」「うん。」「きれいやなっと思って。」、また 13M 「まぶしくてよく見れない。」、16M 「よく見れない。まじまじと。」と同じ発話の繰り返し短い間に二箇所あることから、思うような反応が D から得られていないことが伺える。18D でやっとそれらの M の発話内容に応じた D に対して 0.04 秒という短い間隔で「うん。」と M が応えることから、M は D の反応を待っていたと考えられる。また 13M から 16M のように M が「うちの職場のすごいきれいな人。」(01M)について、繰り返し「きれい」と強調するのは 10M で「コンシーラーいっぱい使ってはりそう。」と文脈によってはマイナスに捉えられかねない発話をしたことに対する補いの意図があったことも考察できる。また 10M の発話が出たのは事例 1 の直前で D がコンシーラーをたくさん使用する外国のセレブリティを話題にしたことが理由である。ここで D は M がなぜ事例 1 の話題を始めたか理解し「あー。」「(L)」「ほうやろうね。」(11D)のように笑いを交えて反応する。それまでの D の反応が芳しくなく「コンシーラー」について M は言及するが、その発話(10M)に不躰さがあった可能性を感じ 13M 以降、話題の人物に対する誇張気味の肯定的な意見を繰り返し述べたと考えられる。D は M のそのような付度を感じとることなく、作業行程の移行点であることに集中したかったため、17D で急に「眉毛を描きます。」という遂行発話を発しさらにその後やや長めの沈黙をするという行動に出たと考察できる。

脱文脈化の観点から見ると、この部分の発話は以下のようにアノテーションできる。発話番号は上の発話と動作アノテーションに合わせて記述する。

[事例 1：発話の脱文脈化度アノテーション]

01 M うちの職場のすごいきれいな人。[説明 13]

02 D うん。

03 M (1.38) すんごいきれい。[説明 13]

04 D (0.65) うん。

03 M(続) (0.15) お化粧品も相当 上手なんだと思う。[説明 13]

04 D(続) うん。

05 D (0.57) 何歳ぐらいの人?。[説明 13]

06 M うん。

06 M(続) (0.92) 三十代後半で(0.10)CAしてはったって。[状況外回想 10]

05 D(続)(0.44) へー。

07 M CAじゃないか。[説明 13]

07 M(続) (1.53) 地上

08 M (0.64) 地上業務員?。[説明 13]

09 D うん うん。(1.40) やってる友達いる。[観測 8]

08 M(続) (0.19) うん。

- 10M (4.74) すんごい華やか。[説明 13]
 10M(続) (1.95) コンシーラーいっぱい使ってはりそう。[説明 13]
- 11D あー。(L) (0.68)ほうやろうね。[説明 13]
 12M うん。
- 11D(続) (0.13) ほれはしてやると思う。[説明 13]
 12M(続) うん。
- 13M (0.62) まぶしくて よく見れない。(1.96) 顔が。[自己記述 7]
- 14M (0.56) きれいやなっと思って。[説明 13]
 15D うん。エステとかも行ってやる。[説明 13]
 14M(続) (0.15) うん。(0.16) きれいやなっと思って。[説明 13]
- 16M (0.41) よく見れない。まじまじと。[自己記述 7]
 17D (0.94) 眉毛を描きます。[行動 1]
 16M うん。
- 18D (4.63) まあ あんまりまじまじと見ても あれやけどよ。[説明 13]
 19M (0.04) うん。

17D の「眉毛を描きます。」は最も脱文脈度の低い「行動」に分類される。これは提言 (proposal) と呼ばれる種類の発話メッセージである。それまで脱文脈度合い 1~14 の内、脱文脈度の非常に高い「説明」が続き、ところどころに「観測」や「自己記述」等の発話が出てきているが、17D で急に脱文脈度が低い、即ち文脈度が非常に高くその場の事物に非常に結びつきの強い「行動」発話が出現する。このように前後との脱文脈度の差からその発話メッセージが談話構造の中で特異なものであることが脱文脈度アノテーションから見てとることができる。17D 直後の 18D で「説明」発話に戻っていることから、17D の発話が緊急性のあるその場の事物に関する発話だったことを読み取ることができるだろう。

また、13M から 16M では「自己記述」が「説明」を囲んで繰り返されており、このことから話者がやや余剰な発話をしていると推測することもできる。

このように、脱文脈度アノテーションから見ても、事例 1 でひとつの話題が続いているが 17D の発話で談話および作業のフェーズが変化したことを読み取ることができる。

事例 1 から雑談を遮断する談話モデルとして、1 節で想定した i) 動作で作業の合図を出す、ii) 発話で作業の合図を出す、iii) 合図ののち作業のフェーズが移行した雑談が続けられる、という手順の iii) に新たに iii') 合図ののち遮断を行った参加者が発話で雑談内容にコメントする、という方策があることが示唆された。iii') の方策は作業の円滑さを確保したあとに会話コミュニケーションの円滑さを補填するために参加者が行なっていると考えられる。

2.4.2 事例 2

共同調理場面からの一事例である。2名の参加者がお菓子作りをしている場面で、一方がよりお菓子作りに詳しく他方に教えながら共同で調理を行なっている。70 分 20 秒の動画中、開始から 26 分 50 秒~27 分 57 秒の場面である。これも、事例 1 同様、一方の参加者が雑談をしている他方の参加者に作業に関する伝達をしようとしている。

しているバニラエッセンスから連想された子供時代に読んでいた漫画を話題にしながら S は作業を遂行する。その話題に答えながら T は「ぐりぐりしてください。」「しっかりとぐりぐり。」(15T)のように遂行発話を発する。この発話に T が伝達したい事項は端的に現れており、S が「しっかりとぐりぐり」ボウル内をかき混ぜれば S は話題を止める必要はない。しかし 15T の発話ののち、T は次の S の質問(16S)に答えながら(17T)、まな板の粉を集めたり泡立て器のコードを掴んだりするなどやや一貫性に欠けた行動をする。このような余剰な行動は T の伝達したい事柄が S に正しく伝わっていないことへの T の動揺とも考えることができる。17T も「あんまり記憶がない。」というように S の質問(16S)に答えてはいるが詳細ではない発話内容である。その後 19S でも続く話題を聞きながら、T は発話も動作も一切止めている。この言動の停止は事例 1 の終了付近で施術者 D が 4.6 秒沈黙したことと相似している。そして次の発話開始タイミングで S が発話開始していることに関わらず同時に T は「ダメダメがなくなるまで グリグリいってください。」(21T)と発話する。T はまだ動作は止めたままだが S が 22S で「ま なかよし」と話題を続けると、また S の発話に重ねて「ちょっと一回いいですか。」と言いながら手を伸ばして S が持つホイッパーとボウルを取り上げ、S よりかなり強い力で粉をかき混ぜる作業を始める。

事例 1 と事例 2 を合わせて考えると、誰が中心的に作業を行っているかによって働きかけのタイミングは異なってくるが言語的・身体的に相手の雑談を止める時の方法は相似していることが見て取れる。

また、事例 2 の発話に脱文脈度をアノテーションしたものが以下である。

[事例 2 : 発話の脱文脈度アノテーション]

01S なんかさ なかよし(0.31)なかよしの って (D ドラ) (F あの:) 漫画があったじゃん。[状況外回想 10]

02T

(0.12)うん。

03S 今もあるけどさ:。[説明 13]

03S (続) (0.39)でさ: バニラエッセンスの漫画があつてさ:。[説明 13]

04S 小さい頃 すごい 憧れてた。[状況内回想 3]

05T (0.30)いきます。[行動 1]

05T(続) (0.46)バニラエッセンス。

06T (3.15) なかよし りぼん でしたね。[状況外回想 10]

07S (1.04) りぼん派だった?。[状況内回想 3]

08T (0.58)うち きょうだいは

09T (0.54)は 姉がいるので:。[説明 13]

10S うーん。

11T (0.19)なか よしとりぼんを両方買ってました。[状況内回想 3]

12T (0.45) [一人一冊だったから。[状況内回想 3]

13S [あー。そうそう そうそう そうそう。

13S(続) なかよしとりぼん派だ。[状況外回想 10]

14S (1.25)りぼんは。

- 15T それで ぐりぐりしてください。(0.07) しっかりとぐりぐり。[行動 1]
- 16S (0.19)りぼんってさ:(0.92) あれでしょ?。[説明 13]
 16S(続) (0.30) あるまいとせんめんきとか読んでた?。[状況内回想 3]
- 17T あー。なんかあったような気[がするけど。[状況外回想 10]
 17T(続) あんまり記憶がない。[状況外回想 10]
 18S [あたし なんか友達がりぼん買った。[状況外回想 10]
 10]
- 19S (0.45) 私はなかよしを買い: [状況内回想 3]
 19S(続) (0.69)(F あの:)(0.62)こう交換してた。[状況内回想 3] (2.46)
- 20S [りぼん りぼんのほうが 女の子 子どもっぽい。[説明 13] (1.71)
 21T [ダメダメがなくなるまで グリグリいってください。[行動 1]
- 22S (G まあ|ま) なかよし(0.56)[キャンディキャンディとか読んでたな。[状況内回想 3]
 23T [ちょっとよろしい 一回いいですか。[行動 1]
 22S(続) (0.25)はい。
- 24T (1.55)まわりの粉を。 ガシガシやるの。[行動 1]
 25S (1.06)ガシガシやるの。[行動 1]
 (0.64) (T そっか)。
- 26S (0.27) [え。なん なんてガシガシやるの?。 [説明 13]
 27T [ガシガシやってもいいの。 [説明 13]
 (0.55)しっかりと混ぜている。[説明 13]
- 26S(続) (0.03)(L)
 27T(続) (L)
 26S(続) (0.28)入る。[観測 8](ここでSはノートにメモを録っている。)

事例2から雑談を遮断する談話モデルとして、1節で想定した i) 動作で作業の合図を出す、ii) 発話で作業の合図を出す、iii) 合図ののち作業のフェーズが移行した雑談が続けられる、という手順に事例1から示唆された iii') 合図ののち遮断を行った参加者が発話で雑談内容にコメントする、という方策が別の場面でも使用されていることが観察された。また、ii) 発話で作業の合図を出す、という方策が上手く機能しない際には、再び非言語的に、しかしより働きかけの大きい iv) 身体的接触を伴う動作で作業の合図を出す、という方策が最終手段のようであることが観測された。

3. おわりに

本研究では、発話の脱文脈化度とジェスチャー区間を用いた動作の分析を行い、共同作業中、作業に集中させるために他の参加者の雑談を遮る時の談話モデルを検討した。i) 動作で作業の合図を出す、ii) 発話で作業の合図を出す、iii) 合図ののち作業のフェーズが移行した雑談が続けられる、という手順があり、合図が受け取られない時 ii)の言語的働きかけからまた非言語的な、しかし i)の方策より強い働きかけで iv)身体的接触を伴う動作で作

業の合図を出すという方策が観察された。また iii') 合図ののち遮断を行った参加者が発話で雑談内容にコメントする、という方策が円滑なコミュニケーションという観点から取られやすいことが観察された。発話の時空間的位置の同定から談話を分析する試みはマルチアクティビティにおける会話の談話分析にも有効と考えられる。今後、発話の時空間的位置の同定をさらに精緻に行えるような分析手段のさらなる開発と、マルチアクティビティに適化した談話モデルの検討をさらに進めていきたい。

謝 辞

本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」による成果を利用して行われたものである。また本研究は科研費19K00588「修辞機能と脱文脈化の観点からの日常談話テキスト分析」の助成を受けたものである。

文 献

- Wallace Chafe (1994). *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of conscious experience in Speaking and Writing*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Carmel Cloran (1994). *Rhetorical Units and Decontextualisation: An Enquiry into some Relations of Context, Meaning and Grammar*. Nottingham: University of Nottingham.
- Carmel Cloran (1995). Defining and relating text segments: Subject and theme in discourse. In Ruquaya Hasan and Peter H. Fries (eds.), *On Subject and Theme: From a Discourse Functional Perspective*. Amsterdam: John Benjamins.
- Carmel Cloran (2010). Rhetorical unit analysis and Bakhtin's chronotype. *Functions of Language*, 17(1), 29-70.
- Ruqaiya Hasan (1991). Questions as a mode of learning in everyday talk. In Thao Le and M. Mccausland (eds), *Language Education: Interaction and Development*, 70-119. Launceston: University of Tasmania.
- Adam Kendon (1972). Some relationships between body motion and speech. In A. Siegman and B.Pope (eds), *Studies in dyadic communication*, 177-210. The Hague: Mouton, pp. 177-210.
- Adam Kendon. (2004). *Gesture: Visible Action as Utterance*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.
- 小磯花絵、天谷晴香、居關友里子、臼田泰如、柏野和佳子、川端良子、田中弥生、伝康晴、西川賢哉 (2020). 「『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的検討」『国立国語研究所論集』18,17-33.
- 前川喜久雄 (2004). 「『日本語話し言葉コーパス』の概要」『日本語科学』15, 111-133.
- Lorenza Mondada (2012). Talking and driving: Multiactivity in the car. *Semiotica* 191, 1/4, 223-256.
- 佐野大樹(2010). 「選択的体系機能言語理論を基底とする特定目的のための作文指導方法について」『専門日本語教育研究』12, 19-26.
- 佐野大樹、小磯花絵(2011)「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証-「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係-」『機能言語学研究』第6巻、pp.59-81
- Merran Toerien and Celia Kitzinger (2007). Emotional labour in action: Navigating multiple involvements in the beauty salon. *Sociology*, 41-4, 645-662.